

博士論文（要約）

論文題目 擦文土器の編年的研究

氏名 榊田 朋広

目次

序章 擦文土器研究の今日的意義と本論の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第1節 擦文時代の考古学研究における土器研究の位置づけ 1

第2節 本論の目的 2

第3節 本論の構成 6

第1章 擦文土器研究史からみた問題の所在と方法論の展望・・・・・・・・・・ 11

はじめに 11

第1節 擦文土器研究の流れ 11

1. 第Ⅰ期：擦文土器研究の揺籃期－土器の特徴の記述と時代的位置づけ－（1950年代まで） 11

2. 第Ⅱ期：擦文土器編年の確立－編年案の共有と土器／文化系統観の対峙－（1950年代～1980年代まで） 12

3. 第Ⅲ期：北海道と東北地方における資料の爆発的増加－編年案の林立と方法論の停滞－（1990年代～現在まで） 19

第2節 編年方法の検討 23

1. 擦文土器の特質 23

2. 近年の擦文土器編年研究の傾向 24

3. 擦文土器編年方法の再検討 25

4. 土器の地域性認定方法の再検討 26

小結 29

第2章 前半期擦文土器甕の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

はじめに 33

第1節 問題の所在と方法論の展望 33

1. 問題の所在 33

2. 分析視点	37
第2節 前半期擦文土器甕の編年	39
1. 石狩低地帯における前半期擦文土器甕の検討	39
2. 後志地方における前半期擦文土器甕の検討	47
3. 前半期擦文土器甕の編年	47
4. 層位学的検証	47
5. その他の属性の消長	49
第3節 分帯系列と一帯系列のゆくえ	50
1. 甕における口唇部文様帯の発達と疑似口縁化	51
2. 中期・後期にみられる2系列の文様施文域	51
3. 出土状況からの検証	54
第4節 前半期擦文土器甕の枠組みと成り立ち	54
1. 前半期擦文土器甕の枠組み－桜井第一型式土師器の再検討－	54
2. 前半期擦文土器甕の成り立ち－文様施文域の系譜－	56
小結	57
第3章 北大式土器の編年と系統	59
はじめに	59
第1節 北大式土器編年研究の問題点と方法論の展望	61
1. 北大式土器研究の黎明	61
2. 擦文土器成立過程研究としての北大式土器研究－「土師器母胎説」と「続縄文土器母胎説」からの評価－	61
3. 北大式土器編年研究の問題点	62
4. 北大式土器編年研究の今日的展望	64
第2節 分析方法	67
第3節 後北C2-D式土器と北大式土器の間	68
1. 「モヨログループ」の位置づけをめぐって	68
2. 属性の抽出	70
3. 属性分析	72
第4節 精製土器甕の編年	76
1. 編年の方法と手順	76
2. 属性の抽出	77
3. タイプと文様要素の相関	84
4. 遺構出土土器の検討	85

5. 細分型式の設定	87
6. 各型式の出土状況の検討	94
第5節 粗製土器甕の編年	97
1. 粗製土器甕の分類	97
2. 細分型式への編成	100
3. 遺構出土例からの検証	102
第6節 注口土器・片口土器の編年	105
1. 注口土器の編年	105
2. 片口土器の編年	106
第7節 道央部における型式細分のまとめ	108
1. 型式細分のまとめ	108
2. 旧稿の編年との対比	108
第8節 道央部以外の北大式土器	111
1. 道北東部の北大式土器	112
2. 道南部の北大式土器	114
3. 東北地方の北大式土器	116
第9節 北大式土器と前半期擦文土器の関係	119
1. 先行研究の今日的評価	119
2. 札幌市 N162 遺跡 1 号竪穴住居址出土土器の検討	120
3. 余市町大川遺跡 SH54 号竪穴住居址出土土器の検討	121
4. 個別の土器の検討	121
5. 北大 3 式土器の細分と前半期擦文土器との編年対比	124
6. 北大式土器の系統と前半期擦文土器分帯系列の関係	124
7. 北大式土器の系統のゆくえと後半期擦文土器	125
第10節 北大式土器の型式学的変遷の実態	125
1. 後北 C2-D 式から擦文土器にいたる変化ータテの系統ー	126
2. 隣接諸型式からもたらされた影響ーヨコの系統ー	128
3. 隣接諸型式との関係からみた北大式土器の型式学的変遷の特質	131
小結	133
第4章 後半期擦文土器甕の編年	145
はじめに	145
第1節 後半期擦文土器甕をめぐる資料的環境の特徴	145
第2節 先行編年の再検討	148

1. モチーフの密度の高低差について	148
2. モチーフの列数について	148
3. 重ね描きモチーフについて	168
4. 口唇部形態の変化について	168
5. 口唇部文様の変化について	169
6. 器高の変化の検討	170
第3節 分析視点	172
1. 分析視点	172
2. モチーフの抽出と分類	174
第4節 後半期擦文土器甕のモチーフの組列	184
1. 後半期初頭のモチーフ	184
2. 後半期初頭以後のモチーフ	188
3. 一括資料におけるモチーフのまとめ	198
4. モチーフの分類と組列の仮定	199
5. 複文様列土器のモチーフ共存状況の検討	199
第5節 後半期擦文土器甕の編年	203
1. 複文様列土器の分類	203
2. 単文様列土器の分類	205
3. 後半期擦文土器甕の編年設定	207
4. 層位学的検証	208
第6節 胆振・日高地方の甕の編年	213
1. 胆振・日高地方の甕を検討するにあたって	213
2. 一括資料の集成	213
3. 編年対比	219
第7節 後半期擦文土器甕の変遷と展開	219
1. 後半期擦文土器甕の成り立ちと変遷の実態	219
2. 後半期擦文土器甕の展開の特質	221
第8節 先行研究との対比	224
小結	227
第5章 トビニタイ式土器の編年と系統	229
はじめに	229
第1節 トビニタイ式土器編年研究小史	230
1. 研究の流れ	230

2. トビニタイ式土器編年研究の問題点	232
第2節 分析視点	236
第3節 トビニタイ式土器の編年	240
1. 属性の抽出	240
2. 属性分析	242
3. トビニタイ式土器の分類	248
4. 個体資料の検討	255
5. 出土状況からの検証	257
6. 編年	259
7. 旧稿編年との対比	260
8. 南千島出土のトビニタイ式土器	262
9. トビニタイ式土器の型式学的特徴	262
第4節 オホーツク貼付文土器からトビニタイ式土器への移行過程	262
1. 研究の現状	262
2. トーサムポロ遺跡 R-1 地点出土オホーツク貼付文土器の特徴	265
3. 属性の抽出	268
4. トーサムポロ R-1 群の分類	270
5. 根室海峡周辺地域におけるオホーツク貼付文土器一括資料の段階区分	270
6. 知床半島以西地域におけるオホーツク貼付文土器の一括資料について	276
7. 先行研究との編年対比	276
8. 再び1群土器の位置づけについて	279
第5節 擦文土器との編年対比	279
第6節 「トビニタイ I 群」の再検討	281
1. 「トビニタイ I 群」の型式学的・系統論的位置づけ	281
2. 「トビニタイ I 群」の編年的位置づけ	283
3. 先行研究との対比	284
第7節 トビニタイ式土器の成立・展開・終焉と擦文土器	285
1. トビニタイ式土器の成立過程	285
2. トビニタイ式土器の展開過程	286
3. トビニタイ式土器の終焉過程	288
4. トビニタイ式土器から擦文土器におよんだ型式学的影響	290
5. トビニタイ式土器と擦文土器の型式間交渉の推移	292
小結	294

はじめに 297

第1節 道南部擦文土器甕の変遷過程の検討 300

1. 器形の検討 300
2. 文様の検討 305
3. 器形と文様の検討のまとめ 309

第2節 札前遺跡出土土器の検討 309

第3節 道南部擦文土器甕の編年と系統 313

1. 道南部擦文土器甕の編年と道央部以東との編年対比 313
2. 後半期擦文土器甕の口唇部文様帯に見られる多様性の解釈 317
3. 後半期擦文土器甕の浸透時における道南部の様相 318

小結 318

第7章 坏・高坏の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 321

はじめに 321

第1節 擦文土器坏編年研究における問題の所在 322

1. 擦文土器坏編年研究小史 322
2. 東北地方土器器坏研究の現状からみた擦文土器坏分析の留意点 324

第2節 擦文土器坏の編年 327

1. 擦文土器坏を分析する属性の抽出 327
2. 器形の分類 329
3. 文様の分類 332
4. 器形と文様からみた坏の分類 333
5. 一括資料からの検証 333
6. 層位学的検証 340

第3節 擦文土器高坏編年研究における問題の所在 341

第4節 擦文土器高坏の編年 343

1. 文様構成の分類 343
2. 脚部高指数の分類 344
3. 文様構成と脚部高指数からみた高坏の分類 347
4. 出土状況からの検証 350
5. 高坏の変遷過程と成立過程 354

第5節 坏・高坏の時期設定 356

第6節 隣接する時期・地域との関係 357

1. 坏系第1段階前半に先行する坏について 357
 2. 東北地方土師器坏との編年対比 358
 3. 道南部の坏・高坏の様相 361
- 第7節 擦文土器坏・高坏の成立と展開 361
- 小結 365

第8章 擦文土器の編年設定と各種編年対比・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 369

はじめに 369

第1節 擦文土器の編年 369

1. 擦文土器の編年 369
2. 擦文土器の変遷の実態 369
3. 先行研究との編年対比 381
4. 擦文土器編年研究における問題提起 382

第2節 広域編年対比 383

1. 北大式土器の広域編年対比 383
2. 擦文土器の広域編年対比 386

第3節 絶対年代の検討 392

1. データの集成 392
2. 各時期の絶対年代の推定 398
3. 擦文土器の終末年代をめぐる研究の展望 398

小結 401

第9章 擦文土器の通時的変動・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 405

はじめに 405

第1節 隣接諸型式との関係からみた擦文土器の成立・展開・変容・終焉 405

1. 擦文土器成立前夜—後北 C2-D 式Ⅲ期～北大3式1類— 405
2. 擦文土器の成立—擦文第1期前半～後半— 408
3. 擦文土器の展開—擦文第2期前半～第3期前半— 409
4. 擦文土器の変容—擦文第3期後半～第4期後半— 413
5. 擦文土器の終焉—擦文第5期— 415

第2節 隣接諸型式との関係史としての擦文土器の通時的変動 416

小結 416

終章 擦文土器編年研究における本論の位置づけ	419
引用・参考文献	425
図表出典	445

本文

2016年11月に博士論文の内容を著した下記書籍を刊行したため、全文公表を控える。

著者名：榊田 朋広

題名：擦文土器の研究—古代日本列島北辺地域土器型式群の編年・系統・動態—

出版社：北海道出版企画センター

出版年：2016年11月10日

ISBN978-4-8328-1610-7 C3020

引用・参考文献

【書籍・論文等】

〈邦文〉

- 青山博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年―福島県中通り地方南部を中心に―」『福島考古』40:45-69
- 赤沢 威 1967 「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』75-2:10-26
- 吾妻俊典 2003 「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」『宮城考古学』5:79-96
- 阿部義平 1999 『蝦夷と倭人』 青木書店
- 阿部義平・須藤 隆・富岡直人・奈良佳子・高橋 哲 2003 「岩出山町木戸脇裏遺跡における北海道系土壇墓と出土遺物の研究」『宮城考古学』5:51-77
- 阿部義平編 2008a 「〔特定研究〕北部日本における文化交流―続縄文期 寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告<上>」『国立歴史民俗博物館研究報告』143
- 阿部義平編 2008b 「〔特定研究〕北部日本における文化交流―続縄文期 寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告<下>」『国立歴史民俗博物館研究報告』144
- 天野哲也 1987 「本州北端部は擦文文化圏にふくまれるか」『考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会、529-544
- 天野哲也 2003 「オホーツク文化前期の地域開発について」『北海道大学総合博物館研究報告』1:66-77
- 天野哲也 2010 「オホーツク文化前期・中期の地域開発と挫折」『北東アジアの歴史と文化』 北海道大学出版会、287-295
- 天野哲也・小野裕子 2007 「擦文文化の時間軸の検討―道央、北部日本海沿岸域と東北北部の関係―」『北東アジア交流史研究』 塙書房、241-268
- 天野哲也・小野裕子編 2007 『古代蝦夷からアイヌへ』 吉川弘文館
- 天野哲也・池田榮史・白杵 勲編 2009 『中世東アジアの周縁世界』 同成社
- 五十嵐国宏 1989 「千島列島出土のオホーツク式土器」『根室市博物館開設準備室紀要』3:9-37
- 石井 淳 1994 「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』5:33-55
- 石附喜三男 1965 「北海道における土師器の諸問題」『先史学研究』5:39-51
- 石附喜三男 1968 「擦文式土器初現的形態に関する研究」『札幌大学紀要教養部論集』1:1-45
- 石附喜三男 1969 「擦文式土器とオホーツク土器の融合・接触関係」『北海道考古学』5:67-80
- 石附喜三男 1973 「“江別式土器”の終末年代と所謂“北大式土器”(一)」『札幌大学紀要』5:33-44

- 石附喜三男 1976 「擦文式文化の終末年代に関する諸問題」『江上波夫教授古稀記念論集(考古・美術編)』 山川出版社、29-50
- 石附喜三男 1984 「擦文式土器の編年的研究」『北海道の研究Ⅱ』 清文堂、127-158
- 伊藤玄三 1970 「所謂『北海道式古墳』の実年代」『古代文化』22-2:25-30
- 伊藤武士 1997 「出羽における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7:32-44
- 伊東信雄 1942 「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』 東京大東書館、19-44
- 伊藤博幸 1989 「陸奥国の黒色土師器—岩手・宮城地域—」『東国土器研究』2:1-15
- 伊藤博幸 1990 「陸奥国の黒色土師器—その展開と終焉—」『東国土器研究』3:1-15
- 井上雅孝 1997 「陸奥における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7:45-56
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』 同成社
- 今村啓爾 2011 「異系統土器の出会い—土器研究の可能性を求めて—」『異系統土器の出会い』 同成社、1-26
- 岩井浩人 2008 「津軽地域における古代土器食膳具の変遷—9 世紀から 11 世紀を中心に—」『青山考古』24:17-43
- 岩井浩人 2009 「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集』 青山考古学会・田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会、187-213
- 上野秀一 1974 「第 3 節 土器群について」『札幌市文化財調査報告書 V N162 遺跡』 札幌市教育委員会、91-103
- 植松暁彦 2008 「庄内地方北部の 10~11 世紀代の土器群の様相」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』5:145-168
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14:1-14
- 氏江敏文 1995 「「南貝塚式土器」に関するメモ」『北海道考古学』31:229-240
- 右代啓視 1991 「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』19:23-49
- 右代啓視 1999 「擦文文化の拡散と地域戦略」『北海道開拓記念館研究紀要』27:23-43
- 臼杵 勲 2004 『鉄器時代の東北アジア』 同成社
- 臼杵 勲 2005 「香深井 A 遺跡出土陶質土器の再考」『海と考古学』六一書房、15-22
- 宇田川洋 1967 「擦文式文化研究略史」『北海道考古学』3:43-47
- 宇田川洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』 みやま書房、151-182
- 宇田川洋 2001 『アイヌ考古学研究・序論』 北海道出版企画センター
- 宇田川洋編 1984 『河野広道ノート 考古篇 5』 北海道出版企画センター
- 内山敏行 2005 「鏃から見た七世紀の北日本」『七世紀研究会シンポジウム 北方の境界接触世界』 七世紀研究会、33-45
- 宇部則保 1989 「青森県における 7・8 世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—」『北海道考古学』25:99-120

- 宇部則保 1997 「7・8世紀の沈線文土師器」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会 1997年度秋田大会実行委員会、111-140
- 宇部則保 2000 「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』462:8-12
- 宇部則保 2002 「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会、247-265
- 宇部則保 2007a 「青森県南部～岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、260-284
- 宇部則保 2007b 「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館、106-138
- 宇部則保 2009 「香深井1遺跡の土師器について」『北海道考古学』45:67-74
- 宇部則保 2010 「九・一〇世紀における青森県周辺の地域性」『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』森話社、311-345
- 宇部則保 2011 「蝦夷社会の須恵器受容と地域性」『海峡と古代蝦夷』高志書院、187-214
- 梅原達治編 1982 『北海道における農耕の起源（予報）—文部省科学研究費による—』札幌大学
- 遠藤勝博・相原康二 1983 「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢Ⅰ』株式会社東出版寧楽社、361-385
- 榎森進・小口雅史・澤登寛聡編 2008 『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として [上] エミシ・エゾ・アイヌ』岩田書院
- 大井晴男 1970 「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』4:21-69
- 大井晴男 1972 「第二節 北海道東部における古式の擦文式土器について—擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論1—」『常呂』東京大学文学部、433-446
- 大井晴男 2004a 『アイヌ前史の研究』吉川弘文館
- 大井晴男 2004b 「『貼付文系オホーツク土器群』の『型式論』的変遷を考える—「型式論」のためのノート(3)—」『北海道考古学』40:167-184
- 大島秀俊 1988 「北大～擦文式土器における整形手法について—小樽市蘭島遺跡群出土土器を中心として—」『北海道考古学』24:105-117
- 大島秀俊 1989 「北海道小樽市蘭島遺跡群における土師器供膳形態の様相について」『北海道考古学』25:79-97
- 大島秀俊・稲垣和幸 1985 「小樽市蘭島餅屋沢遺跡周辺の表採土器について」『北海道考古学』21:99-103
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 大塚達朗 2004 「型式」『現代考古学事典』同成社、105-109
- 大西秀之 1996a 「トビニタイ土器分布圏の諸相」『北海道考古学』32:87-100
- 大西秀之 1996b 「トビニタイ土器分布圏における“擦文式土器”の製作者—異系統土器製作技術の受容にみる集団関係—」『古代文化』48-5:48-62

- 大西秀之 2004 「擦文文化の展開と“トビニタイ文化”の成立ーオホーツク文化と擦文文化の接触・融合に関する一考察ー」『古代』115:125-156
- 大西秀之 2009 『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』 同成社
- 大沼忠春 1980 「続縄文文化」 『北海道考古学講座』 みやま書房、127-150
- 大沼忠春 1989 「北海道の文化」『古代史復元 9 古代の都と村』 講談社、174-184
- 大沼忠春 1996 「北海道の古代社会と文化」『古代蝦夷の世界と交流』 名著出版、103-140
- 大沼忠春・佐藤隆広・江差高校考古学部 1976 「江差町厚沢部川河口遺跡の採集資料」『松山考古学研究会会誌』5:1-10
- 大沼忠春・工藤研治・中田裕香 2004 「総説 続縄文・オホーツク・擦文文化」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文以降』 小学館、37-46
- 大場利夫 1971 「北海道周辺地域に見られるオホーツク文化ーIV 千島ー」『北方文化研究』5:1-30
- 小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題ー十和田 a と白頭山（長白山）を中心にー」『日本律令制の展開』 吉川弘文館、421-456
- 小口雅史 2010 「北日本の古代末から中世」『北東アジアの歴史と文化』 北海道大学出版会、337-356
- 小野哲也 2009 「北海道域における鉄鍋の受容と土器文化の終焉」『中世東アジアの周縁世界』 同成社、86-98
- 小野裕子 1998 「北海道における続縄文文化から擦文文化へ」『考古学ジャーナル』436:4-10
- 小野裕子 2007 「擦文文化後半期に関する年代諸説の検討」『古代蝦夷からアイヌへ』 吉川弘文館、391-418
- 小野裕子 2008 「擦文文化の終末年代をどう考えるか」『アイヌ文化の成立と変容ー交易と交流を中心として [上] エミシ・エゾ・アイヌ』 岩田書院、83-100
- 小野裕子 2011 「続縄文後半期の道央地域の位置についてー土器からみた地域間関係ー」『海峡と古代蝦夷』 高志書院、77-128
- 小保内裕之 2006 「第IV章第3節 古墳時代の土器」『田向冷水遺跡II《第一分冊 本文編》』 八戸市教育委員会、113-125
- 及川 司 1998 「岩手県における11~19世紀の土器ーかわらけを中心としてー」『東北中世考古学会 第4回研究大会資料 東北地方の在地土器・陶磁器II』 東北中世考古学会、65-69
- 利部 修 2010 「本州北端の刻書土器ー北方域の研究史と系譜ー」『北方世界の考古学』 すいれん舎、145-166
- 加藤邦雄 1981 「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学』17:91-113
- 加藤博文・松田 功・木山克彦・布施和洋 2005 「斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第1次報告」『知床博物館研究報告』26:61-70
- 加藤博文・内山幸子・木山克彦・布施和洋・松田 功・マーク・ハドソン 2006 「知床半島

- チャシコツ岬下 B 遺跡で確認したオホーツク文化終末期のヒグマ祭祀遺構について」『北海道考古学』42：129-134
- 加藤博文・布施和洋・小林彩花・山添晶久・濱野由香里・安田龍平・岩波 連・内山晋吾 2009 「斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第 2 次報告」『知床博物館研究報告』30：97-107
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』 纂修堂、277-329
- 金盛典夫・相田光明 1984 「オホーツク文化の終末―擦文文化との関係―」『考古学ジャーナル』235：25-29
- 金子浩昌・橘 善光・奈良正義 1975 「第二次大間貝塚調査概報」『北海道考古学』11：51-66
- 川名広文・高島孝宗 2010 「音標ゴメ島遺跡分布調査報告」『枝幸研究』2：45-62
- 神田和彦 2005 「秋田平野周辺における集落の様相」『第 31 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 古代城柵官衙遺跡検討会、113-140
- 菊池徹夫 1970 「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15：19-33
- 菊池徹夫 1972a 「擦文式土器基本形態の形成」『北海道考古学』8：63-72
- 菊池徹夫 1972b 「トビニタイ土器群について」『常呂』 東京大学文学部、447-461
- 菊池芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
- 木村 高 1994 「東北地方―後北 C2・D 式、北大 I 式土器の周辺―」『北海道考古学』30：101-109
- 木村 高 1998 「青森県域における在地土器の編年について―津軽地方・11 世紀中葉から 12 世紀前半―」『東北中世考古学会 第 4 回研究大会資料 東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』 東北中世考古学会、53-55
- 木村 高 1999 「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係―続縄文土器との共伴事例から―」『研究紀要』4：47-62
- 工藤研治 2004 「続縄文文化の土器」『考古資料大観 第 11 巻 続縄文・オホーツク・擦文以降』 小学館、153-164
- 工藤雅樹 1976 「東北考古学の諸問題」『東北考古学の諸問題』 東出版寧楽社、1-19
- 熊木俊朗 1999 「第 2 節 香深井 5 遺跡出土「元地式」土器について」『北海道礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書(2)』 礼文町教育委員会、159-167
- 熊木俊朗 2001 「後北 C2・D 式土器の展開と地域差―トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位 (2) ー」『トコロチャシ跡遺跡』 東京大学大学院人文社会系研究科、176-217
- 熊木俊朗 2004 「鈴谷式土器編年再論」『アイヌ文化の成立』 北海道出版企画センター、167-189
- 熊木俊朗 2007 「サハリン出土オホーツク土器の編年―伊東信雄氏編年の再検討を中心に―」『北東アジア交流史研究』 塙書房、173-199
- 熊木俊朗 2009 「第 6 章分析 第 1 節人工遺物 1 オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」『史跡最寄貝塚』 網走市教育委員会、303-319

- 熊木俊朗 2010a 「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察—北見市(旧常呂町) 栄浦第二遺跡 9号竪穴オホーツク下層遺構出土土器群の再検討—」『比較考古学の新地平』 同成社、709-718
- 熊木俊朗 2010b 「元地式土器に見る文化の融合・接触」『北東アジアの歴史と文化』 北海道大学出版会、297-313
- 熊木俊朗 2011 「オホーツク土器と擦文土器の出会い」『異系統土器の出会い』 同成社、175-196
- 熊木俊朗 2012 「香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』26:1-38
- 熊木俊朗・福田正宏・榊田朋広・森 岬子・宇田川洋・ワシレフスキー A. A. 2007 「追加資料:セディフ 1 遺跡の出土資料再報告」『極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究』 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設、106-112
- 熊木俊朗・高橋 健編 2010 『千島列島先史文化の考古学的研究』 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 久保 泰 1984 「II 擦文式土器について」『札前』 松前町教育委員会、238-242
- 桑原滋郎 1976 「東北地方北部および北海道の所謂第 I 型式の土師器について」『考古学雑誌』61-4:1-20
- 河野広道 1933 「北海道式薄手縄紋土器群」『北海道原始文化集英』 犀川会、16-21
- 河野広道 1935 「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6:114-122
- 河野広道 1955 「斜里町史先史時代史」『斜里町史』 斜里町教育委員会、1-75
- 河野広道 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23:1-8, 35-42
- 河野広道・名取武光 1938 「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』6:1-41
- 河野広道・名取武光 1940 「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』6:1-41(再録:1972:141-179)
- 越田賢一郎 2003 「III 後志管内の遺跡分布調査」『奥尻町青苗砂丘遺跡II』 北海道埋蔵文化財センター、102-104
- 小嶋芳孝 1996 「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代蝦夷の世界と交流』 名著出版、399-437
- 小杉 康 1995 「土器型式と土器様式」『駿台史学』94:58-131
- 児玉作左衛門・大場利夫 1956 「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11:75-145
- 後藤寿一 1932 「古墳の発掘について—江別遺跡調査報告第一報—」『蝦夷往来』8:37-45
- 後藤寿一 1934 「北海道の先史時代に就いての私見」『考古学雑誌』24-11:709-727
- 後藤寿一 1935a 「北海道の古墳について」『北海道倶楽部』2-2
- 後藤寿一 1935b 「石狩国江別町の竪穴住居跡について」『考古学雑誌』25-2:29-49

- 後藤寿一 1943 「北見国枝幸並に常呂の堅穴について」『北海道先史時代考 1』北海道出版企画センター、121-127
- 後藤寿一・曾根原武保 1934 「胆振国千歳郡恵庭村の遺蹟について」『考古学雑誌』24・2：15-38
- 小林謙一・中澤寛将 2010 「青森県森ヶ沢遺跡の炭素 14 年代測定研究」『中央史学』55：1-39
- 小林 敬 2004 「網走川流域におけるトビニタイ土器群の出土する遺跡」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター、231-243
- 小林 克 1993a 「東北北部の続縄紋期の土器」『二十一世紀への考古学—櫻井清彦先生古稀記念論文集—』雄山閣、246-258
- 小林 克 1993b 「江別 C2 式土器の本州分布をめぐって—『東北続縄紋式』の視点から—」『先史考古学研究』4：153-182
- 駒井和愛 1964 「Ⅲ 擦文土器とオホーツク土器」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下)』東京大学文学部、152-175
- 駒澤大学考古学研究室 2009 「北海道川上郡標茶町二股遺跡第 3 地点における第一次発掘調査報告概報」『標茶町郷土館報告』21：1-20
- 近藤義郎 1976 「原始資料論」『岩波講座 日本歴史 別巻 2』岩波書店、9-36
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』4：1-29
- 齋藤 淳 2002 「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン—市川金丸先生古稀記念献呈論文集—』市川金丸先生古稀を祝う会、267-283
- 齋藤 淳 2008 「北奥出土の擦文土器について」『青森県考古学』16：79-88
- 齋藤 淳 2009 「北奥出土の擦文(系)土器について」『2009 年北海道考古学会研究大会「擦文文化における地域間交渉・交易」資料集』北海道考古学会、18-40
- 齋藤 淳 2011 「古代北奥・北海道の地域間交流—土師器坏と擦文(系)土器甕—」『海峡と古代蝦夷』高志書院、131-185
- 齋藤 淳 2012 「北奥における擦文(系)土器の終末について」『青森県考古学』20：67-80
- 斉藤 傑 1963 「空知郡栗沢町由良遺跡出土の土器」『北海道青年人類科学研究会会誌』1：1-2
- 斉藤 傑 1967 「擦文文化初頭の問題」『古代文化』19・5：77-84
- 斉藤 傑 1971 「擦文文化について考えるためのメモ その 1」『市立旭川郷土博物館研究報告』7：19-33
- 斉藤 傑 1972 「擦文文化について考えるためのメモ その 2」『市立旭川郷土博物館研究報告』8：25-54
- 斉藤 傑 1982 「擦文文化に対する見方」『考古学研究』29・3：115-118
- 斉藤 傑 1983 「擦文土器の成立をめぐる問題」『北海道考古学』19：125-130

- 西蓮寺健 1979 「第五節 いわゆる「北大式」と擦文時代」『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳市教育委員会、168-170
- 西蓮寺健 1981 「いわゆる『北大式』省察野帳—北海道千歳市ウサクマイ遺跡群が提起する問題—」『古代』69・70：83-118
- 榊田朋広 2006 「トビニタイ式土器における文様構成の系統と変遷」『物質文化』81：51-72
- 榊田朋広 2007 「異系統土器論からみたトビニタイ式土器と擦文土器の型式間交渉と動態」『物質文化』84：43-69
- 榊田朋広 2009a 「北大式土器の型式編年—続縄文／擦文変動期研究のための基礎的検討 1—」『東京大学考古学研究室研究紀要』23：39-92
- 榊田朋広 2009b 「土器容量組成からみたトビニタイ文化と擦文文化の関係」『古代』122：123-153
- 榊田朋広 2010 「トビニタイ文化研究の現状と課題」『異貌』28：56-107
- 榊田朋広 2011 「擦文時代前半期甕形土器の型式学的研究—続縄文／擦文変動期研究のための基礎的検討 2—」『日本考古学』32：33-58
- 榊田朋広 2012 「擦文時代後半期土器編年をめぐる諸問題—札幌市 K518 遺跡出土甕形土器を起点として—」『北海道考古学』48：53-68
- 榊原滋高 1998 「青森県における在地土器（かわらけ）の編年について—12世紀後半から18世紀まで—」『東北中世考古学会 第4回研究大会資料 東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』東北中世考古学会、56-62
- 佐久間正明 1996 「坏形土器の共通性から見た「舞台式」と周辺土器群との関係」『法政考古学』22：27-49
- 佐久間正明 2000 「福島県における五世紀代の土器変遷—様式的側面を中心に—」『法政考古学』26：27-59
- 桜井清彦 1958a 「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址—東北地方における集落址の研究—』東京大学出版会、141-156
- 桜井清彦 1958b 「北海道奥尻島青苗貝塚について（第一次調査概報）」『古代』27：1-8
- 笹田朋孝・豊原熙司 2007 「北海道東部・釧路町床丹（トコタン）出土の遺物」『北方探究』8：31-65
- 笹田朋孝・高瀬光永・榊田朋広 2009 「湧別町川西遺跡出土資料の紹介—遠軽町先史資料館「清野コレクション」より—」『北方探究』9：43-50
- 佐藤忠雄 1979 「北海道西南部の擦文文化—青苗貝塚にみる終末期の資料—」『季刊どるめん』22：68-80
- 佐藤達夫 1964 「附・モヨロ貝塚の縄文、続縄文及び擦文土器について」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』東京大学文学部、89-96
- 佐藤達夫 1972 「第四節 擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部、462-488
- 佐藤敏幸 2003 「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方(1)—古代牡鹿地方の土器様式—」『宮城

考古学』5:97-124

佐藤敏幸 2006 「東北地方における7世紀から8世紀前半の土器研究史—関東系土師器研究の現状と新たな研究視点の模索—」『宮城考古学』8:123-144

佐藤敏幸 2007 「vi. 宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、164-209

佐藤信行 1968 「宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡—所謂北大式の南漸資料—」『考古学雑誌』53-4:53-60

佐藤信行 1975 「本州に於ける北大式遺跡の分布とその意義」『北海道考古学』11:67-78

佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社、263-298

佐藤信行 1983 「宮城県内の北海道系遺物」『北奥古代文化』14:1-13

佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究 第1巻 考古学篇』清文堂出版、425-478

佐藤宏之 2007 「第1章 分類と型式」『ゼミナール旧石器考古学』同成社、15-31

佐藤宏之 2010 「旧石器時代研究の歴史」『講座日本の考古学 1 旧石器時代(上)』青木書店、40-73

佐原 真 1999 「文献資料と考古資料」『歴博大学院セミナー 考古資料と歴史学』吉川弘文館、245-276

澤井 玄 1992 「トビニタイ土器群」の分布とその意義」『古代』93:128-151

澤井 玄 2007 「北海道内の七〜一三世紀の土器編年について」『北東アジア交流史研究』塙書房、511-535

澤井 玄 2010 「土器製作技法からみた北海道の土器文化の終焉」『比較考古学の新地平』同成社、730-739

澤井 玄 2012 「サハリン国立大学所蔵クズネツォーヴォ 1 遺跡の擦文土器」『サハリンと千島の擦文文化の土器—サハリンと千島へのアイヌ民族の進出—』函館工業高等専門学校、128-129

汐泊川遺跡調査団 1965 「汐泊遺跡(汐泊川遺跡群第1地点)の資料」『Field』2

菅原祥夫 2007a 「i. 福島県中通り地方南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、22-43

菅原祥夫 2007b 「ii. 福島県中通り地方中部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、44-72

菅原祥夫 2007c 「iii. 福島県浜通り地方南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、73-91

菅原祥夫 2007d 「iv. 福島県会津地方」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、92-118

梶田光明 1996 「トビニタイ文化と擦文文化の様相—根室管内を中心として—」『博物館フォーラム アイヌ文化の成立を考える』北海道立北方民族博物館、115-120

- 杉浦重信 1999 「千島・カムチャッカの様相」『海峡と北の考古学 シンポジウム・テーマ 2・3 資料集Ⅱ』 日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、183-208
- 杉山寿栄男 1938 「北海道石狩國濱益村岡島洞窟遺跡」『人類学雑誌』 53-7: 34-46
- 鈴木克彦 1977 「青森県の擦文文化—擦文文化の外縁圏における一様相—」『季刊どるめん』 22: 81-95
- 鈴木 信 2003 「道央部における続縄文土器の編年」『ユカンボシ C15 遺跡(6)』 北海道埋蔵文化財センター、410-452
- 鈴木 信 2004a 「「北海道式古墳」の実像」『新北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化』 北海道新聞社、10-25
- 鈴木 信 2004b 「古代北日本の交易システム—北海道系土器と製鉄遺跡の分布から—」『宇田川洋先生華甲記念論文集 アイヌ文化の成立』 北海道出版企画センター、65-97
- 鈴木 信 2006 「V 再々報告の金属製品」『西島松 5 遺跡 (4)』 北海道埋蔵文化財センター、151-192
- 鈴木 信 2009 「続縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』 152: 401-440
- 鈴木 信 2010 「砥石からみた鉄利器普及の過程—続縄文期における分析—」『考古学は何を語るのか』 同志社大学考古学シリーズ刊行会、549-558
- 鈴木 信 2011 「二 古墳時代並行期の北方文化 【北海道の続縄文文化】」『講座日本の考古学 古墳時代 (上) 7』 青木書店、726-758
- 鈴木 信・豊田宏良・仙庭伸久 2007 「xi. 北海道南部～中央部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部、304-339
- 鈴木琢也 2006 「擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流」『北方島文化研究』 4: 19-41
- 鈴木琢也 2010 「古代北海道と東北地方の物流」『北方世界の考古学』 すいれん舎、101-118
- 鈴木靖民編 1996 『古代蝦夷の世界と交流 古代王権と交流 1』 名著出版
- 瀬川拓郎 1995 「旭川市旭町 1 遺跡発掘調査報告Ⅰ」『旭川市博物館研究報告』 1: 35-66
- 瀬川拓郎 1996 「擦文文化の終焉—日本海沿岸集団の形成と日本海交易の展開—」『物質文化』 61: 1-17
- 瀬川拓郎 2005 『アイヌ・エコシステムの考古学』 北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2012 「サハリン・千島出土の擦文土器とトビニタイ土器」『サハリンと千島の擦文文化の土器—サハリンと千島へのアイヌ民族の進出—』 函館工業高等専門学校、111-127
- 瀬川拓郎・友田哲弘 1996 「旭川市旭町 1 遺跡発掘調査報告Ⅱ」『旭川市博物館研究報告』 2: 45-63
- 関根達人 2008 「平泉文化と北方交易 2—擦文期の銅鏡をめぐって—」『平泉文化研究年報』 8: 33-50
- 高杉博章 1975 「擦文文化の成立とその展開」『史学』 47-1・2: 99-131

- 高橋千晶 2007 「岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、210-244
- 高橋信雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器との対比」『北奥古代文化』13: 15-30
- 高橋誠明 1999 「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5: 1-20
- 高橋 学 1997 「口縁部に沈線文をもつ土師器—秋田県域での事例—」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会 1997 年度秋田大会実行委員会、91-110
- 高橋 学 1998 「再び「口縁部に沈線文をもつ土師器」について—秋田県域での事例—」『秋田考古学』46: 37-49
- 高嶋孝宗 2005 「オホーツク文化における威信材の分布について」『海と考古学』六一書房、23-44
- 高嶋孝宗 2011 「オホーツク文化における刀剣類受容の様相—枝幸町目梨泊遺跡を中心に—」『北方島文化研究』9: 15-31
- 竹田輝雄 1970 「発足岩陰遺跡概括」『茶津 4 号洞窟遺跡・発足岩陰遺跡』小樽市博物館、29-32
- 田才雅彦 1983 「北大式土器」『北奥古代文化』14: 20-29
- 橋 善光 1975 「青森県大間町奥戸出土の擦文式土器」『北奥古代文化』7: 64
- 千葉 豊 2008 「型式学的方法①」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系』同成社、43-54
- 千代 肇 1965 「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』1: 19-38
- 千代 肇 1969 「北海道奥尻島遺跡調査概報」『考古学雑誌』55-1: 49-58
- 塚本浩司 2002 「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』17: 145-184
- 塚本浩司 2003 「擦文時代の遺跡分布の変遷について」『東京大学考古学研究室研究紀要』18: 1-34
- 塚本浩司 2004 「10 世紀中葉以降、東北北部出土の擦文土器の分類とその背景について」『北方探究』6: 1-12
- 塚本浩司 2007 「石狩低地帯における擦文文化の成立過程について」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館、167-189
- 塚本浩司 2009 「擦文土器からみた地域間関係」『2009 年北海道考古学会研究大会「擦文文化における地域間交渉・交易」資料集』北海道考古学会、7-17
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の画期について（その 2）—7 世紀史の理解をめざして—」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会、323-347
- 辻 秀人 2007a 「栗罎式土師器の成形方法」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部、411-417

- 辻 秀人 2007b 「総括」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部、443-458
- 辻 秀人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
- 富水慶一 1965 「浜中村霧多布出土のオホーツク式土器」『北海道考古学』1：82-85
- 富水慶一 1969 「和天別川河口竪穴住居址群遺跡調査概要(第3次調査)」『北海道考古学』5：49-58
- 富水慶一 1970 「白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報」『北海道考古学』6：71-85
- 豊田宏良 1987 「擦文土器にみる貼付圍繞帯文様の分析—馬蹄形押捺文を中心として—」『遡航』5：59-82
- 仲田茂司 1989 「陸奥国における奈良時代土師器の地域性について」『歴史』72：73-104
- 仲田茂司 1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』4：109-121
- 中田裕香 1990 「石狩低地帯における擦文時代後期の土器について」『古代文化』42-11：19-28
- 中田裕香 1996 「北海道の古代社会の展開と交流—一〇～一三世紀—」『古代蝦夷の世界と交流』 名著出版、141-168
- 中田裕香 2004a 「擦文文化の土器」『新北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化』 北海道新聞社、46-69
- 中田裕香 2004b 「オホーツク・擦文文化の土器」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文以降』 小学館、165-179
- 中田裕香・上野秀一・平川善祥・越田賢一郎・石川直章・藤井誠二・石井 淳 1999 「擦文土器集成」『海峡と北の考古学 シンポジウム・テーマ 2・3 資料集Ⅱ』 日本考古学協会 1999年度釧路大会実行委員会、287-322
- 名取武光 1939 「北海道の土器」『人類学・先史学講座』10：1-41
- 名取武光 1972 『アイヌと考古学(一)』 北海道出版企画センター
- 名取武光・峰山 巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17：107-145
- 新岡武彦 1931 「本道石器時代最後の遺物」『蝦夷往来』創刊号：13-16
- 贅 元洋 1991 「様式と型式」『考古学研究』38-2：112-130
- 西 幸隆 1972 「釧路地方のオホーツク式土器について」『釧路市立郷土博物館々報』207：65-69
- 西 幸隆 1988 「北海道釧路市材木町5遺跡出土の湖州鏡について」『釧路市立博物館紀要』13：1-8
- 西 幸隆・沢 四郎 1975 「釧路湿原周縁の遺跡分布」『釧路湿原総合報告書』 釧路市立郷土博物館、301-336
- 日本貿易陶磁研究会秋田大会事務局編 2007 『日本貿易陶磁研究会秋田大会資料集 出羽の

- 出土陶磁器—安東氏とその時代—』 日本貿易陶磁研究会
- 根本直樹 1985 「火山灰を視点とする擦文式土器編年の一試案」『北海道考古学』21:27-59
- 野村 崇・大島秀俊 1992 「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器 (1)」『北海道開拓記念館調査報告』31:49-65
- 林 謙作 1990 「縄文時代史 6. 縄文土器の型式 (1)」『季刊考古学』32:85-92
- 平川善祥 1995 「サハリン・オホーツク文化末期の様相」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』 北海道開拓記念館、135-156
- 平澤祐子・藤村茂克・八木光則編 1993 『蕨手刀集成 (第 2 版)』 盛岡市教育委員会文化財調査室
- 平光吾一 1929 「千島及び辨天島出土土器破片に就て(2)」『人類学雑誌』44-5:192-200
- 福田正宏 2007 『極東ロシアの先史文化と北海道』 北海道出版企画センター
- 藤沢 敦 1992 「引田式再論」『歴史』79:68-86
- 藤本 強 1965 「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51-4:28-44
- 藤本 強 1972 「第一節 常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』 東京大学文学部、407-433
- 藤本 強 1977 「第二節 続・常呂川下流域の擦文土器について (I)」『岐阜第三遺跡』 東京大学文学部、133-137
- 藤本 強 1979 「トビニタイ文化の遺跡立地」『北海道考古学』15:23-34
- 藤本 強 1980 「第五節 続・常呂川下流域の擦文土器について (II)」『ライトコロ川口遺跡』 東京大学文学部、119-127
- 藤本 強 1982a 『擦文文化』 教育社
- 藤本 強 1982b 「総論」『縄文文化の研究 第 6 巻 続縄文・南島文化』 雄山閣、4-7
- 藤本 強 1983 「文化の認識について—斉藤傑氏に答える—」『考古学研究』29-4:104-107
- 藤本 強 1985 「第五節 続・常呂川下流域の擦文土器について (III)」『栄浦第一遺跡』 東京大学文学部、311-319
- 藤本 強 1988 『もう二つの日本文化』 東京大学出版会
- 藤本 強 2009 『日本列島の 3 つの文化』 同成社
- 古川一明・白鳥良一 1991 「土師器の編年 東北」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』 雄山閣、108-120
- プロコフィエフ M. ・デリュージン V. ・ゴルブノーフ S. (菊池俊彦・中村和之監修)
2012 『サハリンと千島の擦文文化の土器—サハリンと千島へのアイヌ民族の進出—』 函館工業高等専門学校
- 北地文化研究会 1968 「根室市弁天島西貝塚調査概報」『考古学雑誌』54-2:49-64
- 松下 亘 1963 「いわゆる北大式についての一考察—続縄文文化の終末と擦文文化の初源との問題—」『北海道地方史研究』46:6-12
- 松田 猛 2004 「北海道東部太平洋岸における擦文土器について」『宇田川洋先生華甲記念

- 論文集 『アイヌ文化の成立』 北海道出版企画センター、115-131
- 松本建速 2006 『蝦夷の考古学』 同成社
- 三浦圭介 1991 「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』341：22-28
- 三浦圭介 1994 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学 南と北の地域性』 吉川弘文館、149-174
- 三浦圭介 1995 「第3章 古代」『新編弘前市史 資料編 1-1 考古編』、弘前市市長公室企画課、187-391
- 三浦圭介 1998 「北日本の古代文化—亀ヶ岡文化人の末裔たち—」『考古学ジャーナル』436：2-3
- 光井文行 1987 「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』7：71-88
- 光井文行 1990 「岩手県にみられる古代の北海道系土器について—頸部に段をもつ甕形土器を中心に—」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』10：1-10
- 光谷拓実 2007 「第VII章 分析と考察 第1節 年輪年代法による新田(1)、高間(1)遺跡出土木材の年代測定」『石江遺跡群発掘調査報告書』 青森市教育委員会、281-285
- 三辻利一・小野裕子・天野哲也 2008 「オホーツク文化の集団間・対外交流の研究—1. 礼文島香深井1遺跡出土陶質土器の蛍光 X線分析—」『北海道大学総合博物館研究報告第4号 極東民族史におけるアイヌ文化の形成過程』 北海道大学総合博物館、139-152
- 養島栄紀 2001 『古代国家と北方社会』 吉川弘文館
- 宮 宏明 1980 「十勝太若月遺跡出土の擦文前期の新資料」『十勝考古』4：41-42
- 村田晃一 2007 「v. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部、119-163
- 八木光則 1998 「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』10：57-66
- 八木光則 2007a 「渡嶋蝦夷と鹿蝦夷」『古代蝦夷からアイヌへ』 吉川弘文館、139-166
- 八木光則 2007b 「渡島半島における土師器の導入」『北方島文化研究』5：17-30
- 八木光則 2007c 「viii. 岩手県中部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部、245-259
- 八木光則 2007d 「蝦夷と「律令」」『九世紀の蝦夷社会』 高志書院、83-118
- 八木光則 2008 「渡嶋蝦夷と津軽蝦夷」『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として [上] エミシ・エゾ・アイヌ』 岩田書院、69-81
- 八木光則 2010 『古代蝦夷社会の成立』 同成社
- 柳沼賢治 1999 「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器研究』5：21-42
- 柳沼賢治・佐久間正明 2005 「栗罎式土器の成立過程」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会、409-426
- 柳澤清一 2007 『北方考古学の新天地』 六一書房
- 矢野健一 2003 「初期の「型式」と「様式」の相違—山内清男の「型式」と小林行雄の「様式」

- 式」一』『立命館大学考古学論集Ⅲ-2』 1031-1041
- 矢野健一 2007 「縄文時代の編年」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系』 同成社、3-21
- 山浦 清 1983 「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学考古学研究室研究紀要』 2 : 157-179
- 山本哲也 1997 「ロクロ土師器と北海道」『國學院大學考古学資料館紀要』 13 : 78-104
- 横山英介 1982 「擦文時代の開始にからむ諸問題」『考古学研究』 28-4 : 26-35
- 横山英介 1984 「北海道におけるロクロ使用以前の土師器—擦文時代前期の設定—」『考古学雑誌』 70-1 : 52-75
- 横山英介 1990 『擦文文化』 ニュー・サイエンス社
- 横山英介・直井孝一・石橋孝夫 1975 「北海道の土師器—「擦文土器」の母体をめぐっての試論—」 『考古学研究』 22-2 : 32-48
- 吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』 六興出版
- 吉野勢津子 1974 「十勝地方におけるオホーツク」『浦幌町郷土博物館報告』 5 : 13-15
- 渡辺俊一 1981 「石狩低地帯の土師器」『北海道考古学』 17 : 37-53
- ワシレフスキー A. A. (福田正宏・熊木俊朗訳) 2006 「サハリン州コルサコフ地区オホーツコエ村「セディフ遺跡群」における新石器時代・初期鉄器時代・中世の考古学的文化複合」『北海道考古学』 42 : 1-16

〈英文〉 Tezuka, K. and Fitzhugh, B. 2004. New evidence for expansion of the Jomon Culture and the Ainu into the Kuril islands : from IKIP 2000 anthropological research in the Kuril islands. Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin. Vol. 1 : 85-95.

〈露文〉 Березкин Ю. Е. 2002 Керамика из района бухты Оля на острове Итуруп // Археологические Вести №9. С.119-123, Санкт-Петербург. Прокофьев М. М. , Березкин Ю. Е. , Зайцева Г. И. 1989 Новые радиоуглеродные определения абсолютного возраста археологических памятников о. Итуруп (Курильские острова) // Древние культуры Дальнего Востока СССР (археологический поиск) . С.30-34, Владивосток. Стешенко Т. В. , Гладышев С. А. 1977 Древние памятники Курильских островов // Исследования по археологии Сахалинской области. С.21-37, Владивосток.

【発掘調査報告書】

- 青木 誠編 2002 『船浜遺跡Ⅱ』 小樽市教育委員会
- 青木 誠編 2003 『船浜遺跡Ⅲ』 小樽市教育委員会
- 青野友哉編 1999 『ボンマー縄文後期～近世アイヌ文化期の貝塚と集落—』 伊達市教育委

員会

- 青野友哉編 2005 『有珠善光寺 2 遺跡発掘調査報告書』 伊達市教育委員会
- 青森県教育委員会編 1980 『碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1976 『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1988 『李平下安原遺跡』 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1991 『中野平遺跡』 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1998 『小奥戸(2)遺跡・小奥戸(4)遺跡』 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 『岩ノ沢平遺跡』 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 2006 『瀧野遺跡』 青森県教育委員会
- 青柳文吉編 1995 『湧別町川西遺跡』 北海道立北方民族博物館
- 赤石慎三編 2002 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷー苫小牧市静川遺跡・柏原 17 遺跡発掘調査報告書ー』 苫小牧市教育委員会
- 秋山洋司編 1997 『K36 遺跡 タカノ地点』 札幌市教育委員会
- 秋山洋司編 1998 『H37 遺跡 栄町地点』 札幌市教育委員会
- 秋山洋司編 2001 『K39 遺跡 第 7 次調査』 札幌市教育委員会
- 荒生健志・小林 敬 1986 『美幌町文化財調査報告Ⅱ 元町 2 遺跡』 美幌町教育委員会
- 新家水奈・佐藤 剛編 2002 『恵庭市西島松 9 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
旭川市教育委員会 1985 『緑町 4 遺跡』 旭川市教育委員会
- 石井 淳編 2000 『K39 遺跡 第 8 次調査』 札幌市教育委員会
- 石井 淳・出穂雅実・秋山洋司 2002 『K440 遺跡』 札幌市教育委員会
- 石井 淳編 2006 『H519 遺跡』 札幌市教育委員会
- 石川 朗・松田 猛編 1992 『釧路市北斗遺跡Ⅱ』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 1995 『釧路市東釧路貝塚調査報告書』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 1996 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 1999 『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 朗編 2005 『釧路市幣舞 2 遺跡調査報告書Ⅰ』 釧路市埋蔵文化財調査センター
- 石川 徹 1979 『続千歳遺跡』 千歳市教育委員会
- 石川直章編 1998 『文庫歌遺跡Ⅲ』 小樽市教育委員会
- 石附喜三男編 1973 『伊茶仁遺跡ーB 地点発掘報告書ー』 北地文化研究会
- 石附喜三男編 1974 『北海道千歳市ウサクマイ遺跡ーB 地点発掘報告書ー』 千歳市教育委員会
- 石附喜三男編 1977 『北海道千歳市ウサクマイ遺跡ーN 地点発掘報告書ー』 ウサクマイ遺跡調査団
- 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦 1974 『十勝太若月ー第二次調査ー』 浦幌町教育委員会

石橋次雄・山口 徹・後藤秀彦・河村七五三吉 1975 『十勝太若月一第三次調査一』 浦幌町教育委員会

出穂雅実編 1999a 『K499 遺跡・K500 遺跡・K501 遺跡・K502 遺跡・K503 遺跡 (第2分冊)』 札幌市教育委員会

出穂雅実編 1999b 『K499 遺跡・K500 遺跡・K501 遺跡・K502 遺跡・K503 遺跡 (第4分冊)』 札幌市教育委員会

出穂雅実編 2007 『C522 遺跡』 札幌市教育委員会

和泉田毅編 2002 『恵庭市西島松 5 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

稲垣和幸編 1996 『町村農場 1 遺跡(6)』 江別市教育委員会

稲垣はるな編 1999 『能取岬周辺の遺跡』 北海道立北方民族博物館

因幡勝雄 1987 『オムサロ台地堅穴群一昭和 61 年度遺跡保存整備事業概報・I一』 紋別市教育委員会

因幡勝雄 1988 『オムサロ台地堅穴群一昭和 61 年度遺跡保存整備事業概報・II一』 紋別市教育委員会

乾 哲也・小野哲也・奈良智法編 2007 『厚真町 上幌内モイ遺跡 (2)』 厚真町教育委員会

乾 芳宏編 2000 『大川遺跡における考古学的調査II (墓壙編)』 余市町教育委員会

乾 芳宏編 2001 『大川遺跡における考古学的調査IV (総括編)』 余市町教育委員会

乾 芳宏編 2004 『余市町大川遺跡 (2003 年度)』 余市町教育委員会

岩崎卓也・前田 潮編 1980 『北海道東部地区の遺跡研究』 筑波大学歴史・人類学系

上野秀一編 1974 『札幌市文化財調査報告書V N162 遺跡』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1979 『札幌市文化財調査報告書X X K446 遺跡』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1980 『札幌市文化財調査報告書X X II K460 遺跡』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1989 『K441 遺跡 北 34 条地点』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1990 『K135 遺跡 4 丁目地点 (1988 年度調査)』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1995 『K113 遺跡 北 34 条地点』 札幌市教育委員会

上野秀一編 1997 『K39 遺跡 大木地点』 札幌市教育委員会

上野秀一・仙庭伸久編 1993 『K435 遺跡』 札幌市教育委員会

上野秀一・加藤邦雄編 1987 『K135 遺跡 4 丁目地点 5 丁目地点』 札幌市教育委員会

上野秀一・羽賀憲二 1987 『K36 遺跡』 札幌市教育委員会

ウサクマイ遺跡研究会編 1975 『烏柵舞』 雄山閣

宇田川洋 1975 『幾田』 羅臼町教育委員会

宇田川洋・藤本 強 1977 『岐阜第二遺跡』 常栄会

宇田川洋・豊原熙司 1984 『トブー遺跡の発掘調査』 釧路川流域史研究会

宇田川洋・熊木俊朗編 2001 『トコロチャシ跡遺跡』 東京大学大学院人文社会系研究科

宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』 東京大学大学院人文社会系

研究科附属北海文化研究常呂実習施設

- 内山真澄編 1985 『寿都町文化財調査報告書Ⅲ』 寿都町教育委員会
- 内山真澄編 1999 『北海道礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書(2)』 礼文町教育委員会
- 宇部則保・小久保拓也編 2001 『田向冷水遺跡Ⅰ』 八戸遺跡調査会
- 上屋真一編 1987 『カリンバ 2 遺跡』 恵庭市教育委員会
- 上屋真一編 1991 『南島松 1 遺跡・南島松 4 遺跡』 恵庭市教育委員会
- 上屋真一編 1993 『ユカンボシ E9 遺跡・ユカンボシ E3 遺跡』 恵庭市教育委員会
- 上屋真一編 2003 『カリンバ 3 遺跡(1)』 恵庭市教育委員会
- 上屋真一・佐藤幾子 2004 『カリンバ 3 遺跡(3)』 恵庭市教育委員会
- 枝幸町教育委員会編 1980 『ホロナイボ遺跡』 枝幸町教育委員会
- 枝幸町教育委員会編 1981 『ホロナイボ遺跡Ⅱ』 枝幸町教育委員会
- 枝幸町教育委員会編 1983 『ウエンナイ 2 遺跡』 枝幸町教育委員会
- 江別市郷土資料館編 1993 『町村農場 1・2 遺跡(2)』 江別市教育委員会
- 遠軽町教育委員会編 1972 『寒河江遺跡－擦文文化期の遺跡－』 遠軽町教育委員会
- 遠軽町教育委員会編 1994 『寒河江遺跡』 遠軽町・遠軽町教育委員会
- 遠藤昭浩編 1995 『ウサクマイ N・蘭越 7 遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
- 扇谷昌康編 1979 『日高門別の先史遺跡－沙流郡門別町埋蔵文化財発掘調査報告書－』 門別町教育委員会
- 大川 清 1998 『北海二島 禮文・利尻島の考古資料』 窯業史博物館
- 大島秀俊・青木 誠編 1996 『蘭島餅屋沢 2 遺跡』 小樽市教育委員会
- 大谷敏三・田村俊之編 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』 千歳市教育委員会
- 大谷敏三・田村俊之編 1986 『『梅川 3 遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
- 大沼忠春編 1977 『元和(続)』 乙部町教育委員会
- 大野 亨・宇部則保・坂川 進・小保内裕之・渡 則子・藤谷一徳編 2000 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 人首沢遺跡・毛合清水 3 遺跡・大仏遺跡 浅水川河川改修事業関係埋蔵文化財調査報告書 大仏遺跡』 八戸市教育委員会
- 大野 亨編 2002 『盲堤沢(3)遺跡発掘調査報告書』 八戸市教育委員会
- 大野 亨編 2003 『浅水川河川改修事業関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大仏遺跡Ⅱ』 八戸市教育委員会
- 大野 亨・坂川 進・小笠原善範・渡 則子・小久保拓也・杉山陽亮編 2004 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 18』 八戸市教育委員会
- 大場利夫・半沢信一・松崎岩穂・宮下正司 1955 『桧山南部の遺跡』 北海道桧山郡上ノ国村教育委員会・同江差町教育委員会
- 大場利夫・奥田 寛 1960 『女満別遺跡』 女満別町・教育委員会・郷土保勝会

- 大場利夫・石川 徹 1961 『浜益遺跡』 北海道浜益郡浜益村役場・同浜益村教育委員会・同浜益村文化財調査委員会
- 大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸 1961 『上ノ國遺跡』 北海道桧山郡上ノ国村・同上ノ国村教育委員会
- 大場利夫・岡本幹二・児玉讓次 1962 『室蘭遺跡』 北海道室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館
- 大場利夫・棚瀬善一・金子有明 1963 『寿都遺跡』 北海道寿都郡寿都町・北海道寿都郡寿都町教育委員会
- 大場利夫・石川 徹 1966 『恵庭遺跡』 恵庭町教育委員会
- 大場利夫・山崎博信 1971 『天塩川口遺跡』 天塩町教育委員会
- 大場利夫・菅 正敏 1972 『稚内・宗谷の遺跡 (続)』 稚内市教育委員会
- 大場利夫・大井晴男編 1976 『オホーツク文化の研究 2 香深井遺跡 (上)』 東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1981 『オホーツク文化の研究 2 香深井遺跡 (下)』 東京大学出版会
- 岡田淳子・宮 宏明編 2000 『大川遺跡における考古学的調査 I』 余市町教育委員会
- 小樽市教育委員会編 1989 『蘭島遺跡』 小樽市教育委員会
- 小樽市教育委員会編 1991a 『蘭島餅屋沢遺跡』 小樽市教育委員会
- 小樽市教育委員会編 1991b 『蘭島遺跡 C 地点・餅屋沢 2 遺跡 (概報)』 小樽市教育委員会
- 小樽市教育委員会編 1992a 『チブタシナイ遺跡』 小樽市教育委員会
- 小樽市教育委員会編 1992b 『蘭島遺跡 D 地点』 小樽市教育委員会
- 鬼柳 彰・立川トマス・和泉田毅・森 秀之 1984 『美深町楠遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 鬼柳 彰・森 秀之・中田裕香 1989 『深川市東広里遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 鬼柳 彰・田才雅彦・鎌田 望・倉橋直孝編 1992 『恵庭市ユカンボシ E4 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 鬼柳 彰・田才雅彦・鎌田 望・西脇対名夫・倉橋直孝編 1993 『恵庭市ユカンボシ E5 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 小野哲也・天方博章・乾 哲也編 2009 『上幌内モイ遺跡 (3)』 厚真町教育委員会
- 小保内裕之・渡 則子・小久保拓也・杉山陽亮・船場昌子編 2005 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 21』 八戸市教育委員会
- 小保内裕之・杉山陽亮・船場昌子・小久保拓也編 2006 『田向冷水遺跡 II』 八戸市教育委員会
- 街道重昭編 1975 『天塩川口遺跡調査報告書』 天塩町教育委員会
- 柏木大延編 2003 『C424 遺跡・C507 遺跡』 札幌市教育委員会

柏木大延編 2004 『K445 遺跡』 札幌市教育委員会
柏木大延編 2005 『M459 遺跡』 札幌市教育委員会
柏木大延・羽賀憲二編 2005 『C504 遺跡』 札幌市教育委員会
柏木大延・小針大志編 2009 『K518 遺跡 第 2 次調査』 札幌市教育委員会
加藤邦雄編 1976 『札幌市文化財調査報告書X S153 遺跡』 札幌市教育委員会
加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・田部 淳・森岡健二・田村美智子 1984 『札幌市文化財調査報告書X XVII T464 遺跡・T465 遺跡・T466 遺 9 跡・T468 遺跡』 札幌市教育委員会
加藤邦雄編 1995 『K39 遺跡 北 11 条地点』 札幌市教育委員会
加藤邦雄・秋山洋司編 1996 『K113 遺跡北 35 条地点』 札幌市教育委員会
加藤晋平・菊池徹夫・宇田川洋・佐藤隆広 1982 『広瀬遺跡』 常呂川流域史研究会
金盛典夫 1976 『ピラガ丘遺跡―第Ⅲ地点発掘調査報告―』 斜里町教育委員会
金盛典夫・村田良介・松田美砂子 1981 『斜里町文化財調査報告 I ―須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書―』 知床博物館協力会
川内 基編 1987 『ヘロカルウス遺跡』 北海道文化財研究所
川上 淳編 1994 『穂香堅穴群発掘調査報告書』 根室市教育委員会
菊池逸夫・千葉長彦・佐藤則之編 1992 『伊治城跡』 築館町教育委員会
北構保男・岩崎卓也編 1971 『浜別海遺跡』 北地文化研究会
北構保男・前田 潮編 2009 『根室市弁天島遺跡 14 号堅穴の発掘調査―オホーツク文化貼付浮文期の大型住居址―』 北地文化研究会
木村淳一編 2007 『石江遺跡群発掘調査報告書』 青森市教育委員会
木村哲朗編 1996 『堀株神社遺跡発掘調査報告書』 泊村教育委員会
木村哲朗編 1998 『青苗遺跡 (E 地区)』 奥尻町教育委員会
木村哲朗編 1999 『青苗 B 遺跡』 奥尻町教育委員会
木村哲朗編 2003 『青苗遺跡～貝塚台地北東斜面～』 奥尻町教育委員会
木村英明編 1981 『北海道恵庭市柏木 B 遺跡発掘調査報告書』 柏木 B 遺跡発掘調査会
桐生正一編 1987 『高柳遺跡』 滝沢村教育委員会
釧路市教育委員会編 1993 『釧路市北斗遺跡Ⅲ』 釧路市教育委員会
工藤研治・鈴木宏行編 2008 『むかわ町穂別 D 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
工藤哲司編 2004 『鴻ノ巣遺跡第 7 次発掘調査報告書』 仙台市教育委員会
久保 泰 1993 『原口館』 松前町教育委員会
久保 泰・小柳正夫・桐谷賢一編 1975 『松前町建石遺跡・松前町大尽内遺跡発掘報告』 松前町教育委員会
久保 泰・石本省三・松谷 太・斉藤 久 1984 『札前』 松前町教育委員会
熊谷仁志・谷島由貴・中山昭大・影浦 覚・袖岡淳子・大泰司統・広田良成編 2002 『八雲町栄浜 1 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
熊木庫一・加藤晋平・前田 潮編 1979 『「天塩川口遺跡」調査報告書』 天塩町教育委員会

小井川和夫・小川淳一 1982 『御駒堂遺跡』 宮城県教育委員会

河野本道・川上 淳編 1983『駒沢大学北海道教養部考古学研究会紀要 第 3 集』 駒沢大学
北海道教養部考古学研究会

国分直一・北構保男・増田精一・岩崎卓也・前田 潮 1974 『オンネモト遺跡』 根室市教育委員会

越田賢一郎編 2003 『奥尻町青苗砂丘遺跡 2』 北海道埋蔵文化財センター

越田雅司・村田 大・広田良成編 2002 『根室市穂香竪穴群』 北海道埋蔵文化財センター

越田雅司・愛場和人・広田良成編 2003 『根室市穂香竪穴群 (2)』 北海道埋蔵文化財センター

小杉 康編 2002 『北大構内の遺跡X II』 北海道大学

小杉 康編 2003 『北大構内の遺跡X III』 北海道大学

小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2011 『K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』 北海道大学埋蔵文化財調査室

児玉 準編 1984 『三十刈 I・II 遺跡発掘調査報告書』 秋田県教育委員会

小針大志・秋山洋司編 2003 『K523 遺跡』 札幌市教育委員会

小針大志編 2011 『K518 遺跡 第 3 次調査』 札幌市教育委員会

駒井和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 (上)』 東京大学文学部

駒井和愛編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 (下)』 東京大学文学部

小谷地肇・田中寿明・成田和世編 2008 『中野平遺跡発掘調査報告書VII』 おいらせ町教育委員会

小柳リラ子編 2004 『豊浜遺跡』 福島町教育委員会

今野公顕・神原雄一郎・三浦陽一・佐々木亮二・岩城志麻他編 2002 『盛岡市内遺跡群一平成 13 年度発掘調査概報一』 盛岡市教育委員会

斉藤邦典・松田裕美編 2003 『町内遺跡発掘調査事業報告書VI 字石崎地区分布調査・ワシリ遺跡分布調査』 上ノ国町教育委員会

斉藤邦典・加賀谷央編 2004 『町内遺跡発掘調査事業報告書VII ワシリ遺跡分布調査』 上ノ国町教育委員会

斎藤俊明・小松正夫 1987 『宮崎遺跡発掘調査報告書』 西目町教育委員会

西蓮寺健・田村俊之編 1979 『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』 千歳市教育委員会

坂川 進・佐々木浩一・村木 淳・小保内裕之・藤谷一徳編 2000 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 12』 八戸市教育委員会

桜井清彦・菊池徹夫編 1987 『蓬田大館遺跡』 六興出版

桜田 隆編 1978 『青森市三内遺跡』 青森県教育委員会

佐藤一夫・宮夫靖夫編 1984 『タプコブ』 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター

- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 1997 『柏原 5 遺跡』 苫小牧市教育委員会
- 佐藤和雄・和泉田毅・土肥研晶・佐藤 剛編 2004 『恵庭市西島松 5 遺跡(3)』 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤和雄・鈴木 信・土肥研晶・立田 理・吉田裕吏洋編 2006 『恵庭市西島松 5 遺跡(4)』 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤和雄・土肥研晶・吉田裕吏洋編 2008 『恵庭市西島松 3 遺跡・西島松 5 遺跡(5)』 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤和雄・土肥研晶・柳瀬由佳編 2010 『恵庭市西島松 2 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤一志編 2000a 『大麻 3 遺跡(8)』 江別市教育委員会
- 佐藤一志編 2000b 『大麻 3 遺跡(9)』 江別市教育委員会
- 佐藤隆広編 1994 『目梨泊遺跡』 枝幸町教育委員会
- 佐藤忠雄編 1981 『奥尻島青苗遺跡』 奥尻町教育委員会
- 沢 四郎編 1963 『阿寒町の文化財 先史文化篇第 1 輯』 阿寒町教育委員会
- 沢 四郎編 1971 『弟子屈町下鎧別遺跡発掘報告』 弟子屈町教育委員会
- 沢 四郎他 1971 『羅臼』 羅臼町教育委員会
- 沢 四郎編 1972 『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』 北海道出版企画センター
- 沢 四郎・西 幸隆編 1975 『釧路市北斗遺跡調査概要』 釧路市教育委員会
- 沢 四郎・松田 猛編 1977 『弟子屈町矢沢遺跡調査報告―第 1 次調査―』 弟子屈町教育委員会
- 柴田信一・三浦孝一 1992 『コタン温泉遺跡 縄文時代集落と貝塚の調査』 八雲町教育委員会
- 柴田信一・横山英介・吉田 力 2004 『栄浜 2・3 遺跡』 八雲町教育委員会
- 柴田信一・三上英則 2009 『浜中 1 遺跡発掘調査報告書』 八雲町教育委員会
- 島田祐悦・信太正樹編 2009 『大鳥井山遺跡―第 9 次・第 10 次・第 11 次調査―』 横手市教育委員会
- 白糠町教育委員会編 1969 『北海道白糠町の先史文化 第四輯』 白糠町教育委員会
- シン・荒井共同企業体編 2012 『近文町 5 遺跡・近文町 6 遺跡』 旭川市
- 末光正卓・広田良成編 2011 『千歳市キウス 5 遺跡(9)』 北海道埋蔵文化財センター
- 梶田光明 1978 『標津の竪穴』 標津町教育委員会
- 梶田光明 1980 『標津の竪穴Ⅲ』 標津町教育委員会
- 梶田光明 1981 『標津の竪穴Ⅳ』 標津町教育委員会
- 梶田光明 1982 『史跡標津遺跡群カリカリウス遺跡発掘調査報告書』 標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1983 『標津の竪穴Ⅵ』 標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1985 『標津の竪穴Ⅷ』 標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1986 『標津の竪穴Ⅸ』 標津町教育委員会

梶田光明・梶田美枝子 1987 『標津の竪穴X』 標津町教育委員会
梶田光明・梶田美枝子 1988 『標津の竪穴X I』 標津町教育委員会
梶田光明編 2010 『標津川河岸遺跡』 標津町教育委員会
鈴木宏行編 2011 『釧路町天寧 1 遺跡(2)ー町道改良地点ー』 北海道埋蔵文化財センター
鈴木 信・三浦正人・鎌田 望・千葉英一編 1995 『千歳市オサツ 2 遺跡(1)・オサツ 14 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
瀬川拓郎編 1984 『錦町 5 遺跡』 旭川市教育委員会
瀬川拓郎編 1985 『錦町 5 遺跡Ⅱ』 旭川市教育委員会
瀬川拓郎編 1988 『錦町 5 遺跡Ⅲ』 旭川市教育委員会
瀬棚町教育委員会編 1985 『南川 2 遺跡』 瀬棚町教育委員会
仙庭伸久・上野秀一編 1995 『H317 遺跡』 札幌市教育委員会
園部真幸編 1991 『高砂遺跡(8)』 江別市教育委員会
其田良雄編 1974 『上ノ国町四十九里沢 A 遺跡発掘報告書』 上ノ国町教育委員会
高木 晃編 2002 『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高橋 理編 1996 『末広遺跡における考古学的調査Ⅳ』 千歳市教育委員会
高橋正勝編 1971 『柏木川』 北海道文化財保護協会
高橋正勝編 1980 『アヨロ遺跡ー続縄文(恵山式土器)文化の墓と住居址ー』 北海道先史学協会
高橋正勝編 1982 『萩ヶ岡遺跡』 江別市教育委員会
高橋正勝・直井孝一編 1989 『高砂遺跡(5)』 江別市教育委員会
高橋 学 1992 『国道 103 号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵー上野遺跡ー』 秋田県埋蔵文化財振興会
高橋勇人編 2009 『釧路市幣舞 2 遺跡調査報告書Ⅱ』 釧路市埋蔵文化財調査センター
高嶋孝宗編 1999 『落切川左岸遺跡』 枝幸町教育委員会
田口 尚編 1993 『美沢川流域の遺跡群XⅥ』 北海道埋蔵文化財センター
武田 修 1993 『常呂遺跡』 常呂町教育委員会
武田 修編 1983 『TK07 遺跡』 常呂町教育委員会
武田 修編 1988 『TK67 遺跡』 常呂町教育委員会
武田 修編 1995 『栄浦第二・第一遺跡』 常呂町教育委員会
武田 修編 1996 『常呂川河口遺跡(1)』 常呂町教育委員会
武田 修編 2000 『常呂川河口遺跡(2)』 常呂町教育委員会
武田 修編 2002 『常呂川河口遺跡(3)』 常呂町教育委員会
武田 修編 2004 『常呂川河口遺跡(4)』 常呂町教育委員会
武田 修編 2005 『常呂川河口遺跡(5)』 常呂町教育委員会
武田 修編 2006 『常呂川河口遺跡(6)』 常呂町教育委員会

- 武田 修編 2007 『常呂川河口遺跡(7)』 北見市教育委員会
- 武田 修編 2008 『常呂川河口遺跡(8)』 北見市教育委員会 (ところ埋蔵文化財センター)
- 竹田輝雄 1970 『積丹半島調査報告書 茶津 4 号洞窟遺跡・発足岩陰遺跡』 小樽市博物館
- 竹田輝雄・千代 肇・福田茂夫 1993 『伊達市有珠オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡』 伊達市教育委員会
- 立川トマス・末光正卓編 1999 『恵庭市ユカンボシ E7 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 田中 亮編 2012 『C544 遺跡』 札幌市教育委員会
- 田部 淳編 1997 『ヘロカルウス遺跡 E~G 地点』 泊村教育委員会
- 田部 淳・村上章久編 2005 『堀株 1 遺跡 (2)』 泊村教育委員会
- 種市幸生・田中哲郎・菊池慈人・山中文雄・遠藤昭浩・松田淳子編 2001 『千歳市ウサクマイ N 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 田村俊之編 1985 『末広遺跡における考古学的調査(続)』 千歳市教育委員会
- 田村俊之・高橋 理編 1989 『イヨマイ 6 遺跡における考古学的調査(1)』 千歳市教育委員会
- 田村俊之・高橋 理・豊田宏良編 1991 『祝梅川山田遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
- 田村俊之編 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
- 千歳市教育委員会編 1978 『祝梅三角山 D 遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
- 千歳市教育委員会編 1981 『末広遺跡における考古学的調査(上)』 千歳市教育委員会
- 茅野嘉雄・岩田安之・木村 高編 2009 『米山(2)遺跡VI・宮田館遺跡VII』 青森県教育委員会
- 千葉大学考古学研究室編 2005 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 1 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2006 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 2 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2007 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 3 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2008 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 4 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2009 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 5 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2010 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 6 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室
- 千葉大学考古学研究室編 2011 『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 7 次発掘調査概報』 千葉大学考古学研究室

報』 千葉大学考古学研究室

千代 肇 1972 『穂内館』 福島町教育委員会

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 考古学研究室・常呂研究室編 1995 『ライトコロ右岸遺跡』 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』 東京大学文学部

苫小牧市教育委員会編 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ－厚真町厚真 7 遺跡・共和遺跡・早来町遠浅 1 遺跡発掘調査報告書－』 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター

苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1990 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ－厚真町厚真 3・12 遺跡・苫小牧市静川 8 遺跡発掘調査報告書－』 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター

苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ－苫小牧市静川 19・静川 26・柏原 18 遺跡発掘調査報告書－』 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター

苫前町教育委員会編 1987 『香川三線遺跡』 苫前町教育委員会

苫前町教育委員会編 1988 『香川 6 遺跡・香川三線遺跡』 苫前町教育委員会

富水慶一 1969a 『北海道白糠町の先史文化－第三輯－』 白糠町教育委員会

富水慶一 1969b 『北海道白糠町の先史文化 第二輯・第三輯収録篇』 白糠町教育委員会

豊原熙司・福土廣志 1980 『浜中町埋蔵文化財分布調査報告－第 3 次報告－』 浜中町教育委員会

豊原熙司・福土廣志 1981 『浜中町埋蔵文化財分布調査報告－第 4 次報告－』 浜中町教育委員会

豊原熙司・涌坂周一 1981 『植別川遺跡』 羅臼町教育委員会

直井孝一編 1976 『Wakkaoi II』 石狩町教育委員会

直井孝一編 1977 『Wakkaoi III』 ワッカオイ調査団

直井孝一・園部真幸編 1983 『江別市文化財調査報告書 XVII』 江別市教育委員会

直井孝一編 1988 『高砂遺跡(4)』 江別市教育委員会

長町章弘編 2004 『柏木川 7 遺跡』 恵庭市教育委員会

中村良一・工藤利幸・高橋義介 1988 『大久保・西久保遺跡発掘調査報告書』 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

名寄市教育委員会編 1979 『名寄市文化財調査報告書 I』 名寄市教育委員会

奈良智法・乾 哲也編 2010 『厚真町厚幌 1 遺跡(2)・幌内 7 遺跡(1)』 厚真町教育委員会

奈良智法・乾 哲也・熊谷 誠編 2009 『厚真町ニタップナイ遺跡 (1)』 厚真町教育委員会

西 幸隆・沢 四郎編 1974 『釧路市貝塚町 1 丁目遺跡調査報告－第 4 次調査－』 釧路市立郷土博物館

西 幸隆・松田 猛編 1983 『北海道阿寒町下仁々志別竪穴群』 阿寒町教育委員会

西 幸隆・菅谷誉紫子・蛭原真奈美・松田 猛 1989 『釧路市材木町 5 遺跡調査報告書』 釧路考古学研究会

野月寿彦・石井 淳編 2008 『K528 遺跡』 札幌市教育委員会

野月寿彦・秋山洋司編 2010 『N533 遺跡』 札幌市教育委員会

野中一宏編 1997 『町村農場 1 遺跡(7)』 江別市教育委員会

野辺地初雄・野辺地章太・高橋 昇編 2004 『岩内町東山 1 遺跡』 岩内町教育委員会

野村 崇編 1997 『北海道由仁町の先史遺跡[復刻版]』 由仁町教育委員会

野村 崇他 1982 『ニツ岩』 北海道開拓記念館

羽賀憲二編 1989 『K441 遺跡 北 33 条地点・N12 遺跡』 札幌市教育委員会

羽賀憲二編 1992 『N426 遺跡』 札幌市教育委員会

羽賀憲二編 1999a 『N156 遺跡』 札幌市教育委員会

羽賀憲二編 1999b 『K499 遺跡・K500 遺跡・K501 遺跡・K502 遺跡・K503 遺跡 (第 1 分冊)』 札幌市教育委員会

羽賀憲二編 2004 『N30 遺跡 (第 2 次調査)』 札幌市教育委員会

長谷川徹編 1986 『有珠善光寺 2 遺跡』 伊達市教育委員会

東通村教育委員会編 1999 『東通村史一遺跡発掘調査報告書編一』 東通村教育委員会

平川善祥編 1995 『雄武堅穴群遺跡』 北海道開拓記念館

弘前市教育委員会編 2001 『早稲田遺跡・福富遺跡発掘調査報告書』 弘前市教育委員会

深川市教育委員会編 1997 『東納内遺跡』 深川市教育委員会

福士廣志 1983 『姉別川 17 遺跡発掘調査報告』 浜中町教育委員会

福士廣志 1985 『高砂遺跡第 2 地点発掘調査報告』 小平町教育委員会

藤井誠二編 1997 『K39 遺跡 長谷工地点』 札幌市教育委員会

藤井誠二編 1998 『K39 遺跡 緑化地点』 札幌市教育委員会

藤井誠二編 2001 『K39 遺跡 第 6 次調査』 札幌市教育委員会

藤井 浩編 1996 『千歳市ユカンボシ C9 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

藤田 登編 1985 『御幸町一茅部郡森町における縄文時代の住居址と土壌群発掘記録一』 森町教育委員会

藤田 登編 1993 『尾白内 2一続縄文遺跡の調査報告一』 森町教育委員会

藤本 強編 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』 北海道常呂郡常呂町

藤本 強編 1977 『岐阜第三遺跡』 東京大学文学部

藤本 強編 1980 『ライトコロ川口遺跡』 東京大学文学部

藤本 強・宇田川洋編 1982 『岐阜第二遺跡一1981 年度一』 常呂町

藤本 強編 1985 『栄浦第一遺跡』 東京大学文学部

北海道大学埋蔵文化財調査室編 1986 『サクシュコトニ川遺跡』 [株]北海道機関紙印刷所
出版企画室

北海道埋蔵文化財センター編 1982a 『美沢川流域の遺跡群V』 北海道埋蔵文化財センタ

ー

北海道埋蔵文化財センター編 1982b 『美沢川流域の遺跡群VI』 北海道埋蔵文化財センタ

ー

北海道埋蔵文化財センター編 1982c 『吉井の沢の遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1986 『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1988 『新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 第2分冊 美沢川流域の遺跡群X I』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1990 『美沢川流域の遺跡群X III』 北海道埋蔵文化財センタ

ー

北海道埋蔵文化財センター編 1992 『美沢川流域の遺跡群X V 第1分冊 美々3 遺跡・美々7 遺跡・美々8 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1993 『美沢川流域の遺跡群X VI 第1分冊 美々7 遺跡・美々8 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1994a 『美沢川流域の遺跡群X VII 美沢 3 遺跡・美々8 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1994b 『千歳市ユカンボシ C2 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

北海道埋蔵文化財センター編 1998 『千歳市キウス 5 遺跡(5)』 北海道埋蔵文化財センタ

ー

北海道夕張東高等学校郷土研究部編 1967 『夕張川流域の先史遺跡』 北海道夕張東高等学校郷土研究部

本田克代・豊原熙司・涌坂周一 1980 『船見町高台遺跡』 羅臼町教育委員会

本田克代・村田吾一 1980 『国後島の遺物』 羅臼町教育委員会

前田 潮・藤沢隆志編 2001 『北海道礼文町香深井 6 遺跡発掘調査報告書』 礼文町教育委員会

前田 潮・山浦 清編 2004 『根室市トーサムポロ遺跡 R-1 地点の発掘調査報告書ーオホーツク文化末期の竪穴群ー』 北地文化研究会

前田正憲編 2000 『原口 A 遺跡』 松前町教育委員会

前山精明・相田泰臣編 2002 『南赤坂遺跡』 巻町教育委員会

眞壁 建・松田亜紀子編 2003 『山田遺跡発掘調査報告書 (I~K・M1 区)』 鶴岡市教育委員会

松田 功他 1993 『オシヨコマナイ河口東遺跡・オタモイ 1 遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会

松田 功・中村竹虎・門間 勇 2002 『チャシコツ岬下 B 遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会

松田 功・豊原熙司・坂井通子・因幡勝雄 2006 『クシュンコタン遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会

松田 功・村本周三・田代雄介 2011a 『ウトロ遺跡』 斜里町教育委員会

松田 功・村本周三・田代雄介 2011b 『チャシコツ岬下 B 遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会

松田淳子編 2004 『トメト川 3 遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会

松谷純一・上屋真一編 1988 『中島松 6・7 遺跡』 恵庭市教育委員会

松谷純一編 1989 『中島松 5 遺跡 A 地点』 恵庭市教育委員会

松谷純一編 1992 『中島松 1 遺跡・南島松 4 遺跡・南島松 3 遺跡・南島松 2 遺跡』 恵庭市教育委員会

松谷純一編 1995 『ユカンボシ E7 遺跡』 恵庭市教育委員会

松谷純一編 1997 『茂漁 4 遺跡』 恵庭市教育委員会

松谷純一編 2004 『恵庭公園遺跡』 恵庭市教育委員会

松前町教育委員会編 1989 『札前Ⅱ』 松前町教育委員会

松前町教育委員会編 1991 『札前Ⅲ』 松前町教育委員会

三浦孝一編 2004a 『オクツナイ 2 遺跡』 八雲町教育委員会

三浦孝一編 2004b 『浜松 3 遺跡』 八雲町教育委員会

三浦孝一・柴田信一・吉田 力 2005 『浜松 2 遺跡Ⅲ』 八雲町教育委員会

三浦正人・倉橋直孝編 1997 『千歳市キウス 7 遺跡(4)』 北海道埋蔵文化財センター

三浦正人・鈴木 信編 1998 『千歳市ユカンボシ C15 遺跡(1)』 北海道埋蔵文化財センター

三浦正人・菊池慈人・皆川洋一・新家水奈・阿部明義・愛場和人・袖岡淳子・広田良成編 2008 『千歳市キウス 9 遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

皆川洋一編 2002 『奥尻町青苗砂丘遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

峰山 巖・金子浩昌・松下 亘・竹田輝雄 1971 『天内山ー続縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡ー』 北海道出版企画センター

峰山 巖・宮塚義人 1983 『おびらたかさご』 小平町教育委員会

峰山 巖編 1984 『伊達市南有珠 7 遺跡発掘調査報告』 伊達市教育委員会

宮 宏明編 1988 『柏木川 8 遺跡・柏木川 13 遺跡』 恵庭市教育委員会

宮 宏明編 1989 『沢町遺跡』 余市町教育委員会

宮 宏明編 1999 『入舟遺跡における考古学的調査』 余市町教育委員会

宮塚義人 1983 『おびらたかさごⅡ』 小平町教育委員会

村田 大・吉田裕吏洋編 2005 『恵庭市柏木川 4 遺跡(2)ーA・C 地区ー』 北海道埋蔵文化財センター

森 秀之編 2004 『茂漁 7 遺跡・茂漁 8 遺跡』 恵庭市教育委員会

森 靖裕他 1990 『矢不來 3 遺跡』 上磯町教育委員会

森岡健治編 1996 『カンカン 2 遺跡』 平取町教育委員会
森岡健治編 2010 『パンケヌツチミフ遺跡』 平取町教育委員会
森町教育委員会編 1994 『御幸町 2-茅部郡森町における縄文時代の住居址と土壌群発掘記録-』 森町教育委員会
柳沼弥生編 1996 『笹浪屋敷遺跡』 上ノ国町教育委員会
山崎博信・長谷川功・宮島武彦・高橋稀一・海老原郁雄・今井勝人・斉藤武一 1965 『開生遺跡』 道北先史文化調査団・名寄郷土史研究会
山本文男編 1981 『別保川左岸 1 遺跡発掘調査報告書』 釧路町教育委員会
山本文男編 1984 『ノトロ岬』 音別町教育委員会
八幡一郎・増田精一・岩崎卓也編 1966 『北海道根室の先史遺跡』 根室市教育委員会
横山英介・石橋孝雄編 1975 『Wakkaoi』 石狩町教育委員会
横山英介編 2000 『上藤城 3 遺跡発掘調査報告書』 七飯町教育委員会
吉崎昌一・横山英介・直井孝一・伊藤千尋・鮑津博史・岡安 武・中岡宇田子編 1975 『紅葉山砂丘における考古学的調査報告』 石狩町教育委員会
吉崎昌一・岡田淳子編 1981 『北大構内の遺跡 1』 北海道大学
吉崎昌一・岡田淳子編 1987 『北大構内の遺跡 5』 北海道大学
米村哲英 1970 『ピラガ丘遺跡』 斜里町教育委員会
米村哲英 1972 『ピラガ丘遺跡-第Ⅱ地点発掘調査概報-』 斜里町教育委員会
米村哲英・金盛典夫 1976 『ピラガ丘遺跡-第Ⅲ地点発掘調査報告-』 斜里町教育委員会
米村哲英編 1991 『浜佐呂間Ⅰ遺跡・HS-05 遺跡』 佐呂間町教育委員会
米村 衛編 1993 『嘉多山 3 遺跡・嘉多山 4 遺跡』 網走市教育委員会
米村 衛編 2009 『史跡最寄貝塚』 網走市教育委員会
涌坂周一・豊原熙司・本田克代・大場靖友 1984 『松法川北岸遺跡』 羅臼町教育委員会
涌坂周一他 1991 『オタフク岩遺跡』 羅臼町教育委員会
涌坂周一編 1996 『相泊遺跡(2)』 羅臼町教育委員会
涌坂周一編 2002 『隧道丘陵地遺跡』 羅臼町教育委員会
和田英昭・米村 衛 1986 『嘉多山遺跡』 網走市教育委員会

論文の内容の要旨

論文題目 擦文土器の編年的研究

氏名 榊田 朋広

本稿は、北海道島の擦文土器編年を資料が増加した今日的視野から検討・整備し、擦文土器の成立・展開・変容・終焉過程を時空間的に隣接する土器型式との関係史として読み解くことを目指したものである。

第1章では、研究史の整理と方法論の展望をおこなった。今日の擦文土器編年研究には、全道的な土器編年と小地域（個々の遺跡や遺跡群等）の土器の実態に不整合が見られるという問題がまったく解消されていないことや、東北地方土師器編年研究で用いられる土器様式論が無批判に援用されるために擦文土器の時期差と地域差が十分整理されず、編年の細分や地域性を認識するうえで方法論的な行き詰まりが生じていること、といった問題が見られる。これを解決するために本稿では、①個々の遺構出土土器の分析結果を総合して全道的な土器編年を組み立てる、②遺構出土土器を構成する個別器種（甕・坏）単位で時期差と地域差を弁別しながら編年を設定したのち、各器種の編年を総合して器種組成単位の編年を設定するという階層的な手続きを踏まえる、という2つの姿勢をとることにした。この姿勢は、全道に散らばる断片的な資料を型式学的につないで組み立てる方法や、数例の遺構一括資料を標識に見立てて残りの資料を当てはめてゆく方法など、先行研究で用いられてきた編年方法とは異なるものである。

第2章～第7章では擦文土器甕・坏・高坏、およびそれらと時空間的に隣接する土器型式の編年研究、第8章では各器種編年を総合した擦文土器の全体的な編年整備および広域編年対比、第9章では擦文土器と隣接諸型式との関係史の復元をおこなった。擦文土器は当初道央部石狩低地帯周辺に濃密な分布を示し、白頭山・苫小牧火山灰降灰期頃に道北・東部へ分布域を拡げることが知られており、本稿では便宜的に前者を「前半期」、後者を「後半期」と呼称している。

第2章では、文様施文域に着目し、前半期擦文土器甕の編年を第1段階前半、同後半、第2段階の3時期に細分した。前半期擦文土器甕の文様施文域は、東北地方土師器甕の系統を引く「一帯配置」と、これと異なる「分帯配置」という2つの系列から成り立っており、その変遷が当初別個に存在した2種の文様施文域が時間と共に融合してゆく過程であることを明らかにした。

この「分帯配置」の文様施文域は先行する北大式土器の系統を引く可能性が考えられたため、続く第3章では北大式土器の編年整備と型式学的変遷過程の復元をおこなった。北大式は続縄文時代後葉の後北 C2-D 式と前半期擦文土器をつなぐ土器型式として著名であ

る。その編年を、器形、文様帯、文様の 3 属性を柱として分析することで、北大 1 式古段階、同新段階、同 2 式、同 3 式の 3 型式 4 時期に細分した。この編年にもとづき、北大式の属性の備わり方は変異に富む一方で個々の属性は前後する時期で強い連続性をもって変遷していることや、後北 C2-D 式末期から北大 1 式新段階まではオホーツク土器からの型式学的影響が強く北大 2 式を境に東北地方土師器からの型式学的影響が強まることなどを明らかにした。北大式の変遷とは、後北 C2-D 式の系統を引く属性がオホーツク土器や東北地方土師器と接点を持ちながら交錯と変容を繰り返す過程として捉えられるものであり、前半期擦文土器成立前夜に北海道島と南北に隣接地域とで諸型式の頻繁な交渉があったことが確かめられた。また、北大 3 式を前半期擦文土器甕に先行する 1 類と併行する 2 類に細分した。北大 3 式 1 類は「分帯配置」の文様施文域を有することから、前半期擦文土器甕の「分帯配置」系列は北大式の系統を引くと考えられた。第 2 章の成果を加味すると、前半期擦文土器甕の変遷は、北海道島在地土器系統の「分帯配置」と東北地方土師器系統の「一帯配置」が接触し融合するという構図で理解できるものである。そして、この前半期擦文土器甕に北大 3 式 2 類がさらに融合することで、後半期擦文土器甕が成立することが明らかになった。

第 4 章では、後半期擦文土器甕の編年整備をおこなった。後半期擦文土器甕は、何種類もの文様モチーフの存在、頸胴部文様が複列化しているもの（「複文様列土器」）としていないもの（「単文様列土器」）の併存、装飾的な口唇部をもつものともたないものの併存など、その型式学的特徴の多様性が目立つ。そして、同じ遺構出土土器でこのような変異が確認される一方で、100 km 以上離れた遺跡で同じ特徴をもつ土器が確認されるなど、各地で錯綜するあり方を示す特徴がある。したがって、オーソドックスな型式論（佐藤 1972）や数例の一括資料を標識とするセット論（塚本 2002）ではその編年に説得力をもたせることは難しいと考えられた。そこで、各地の後半期擦文土器甕に通底する原則として、①複文様列土器に施文される個々のモチーフには製作時の同時性が備わる、②複文様列土器と単文様列土器では施文されるモチーフに共通点がある、という 2 点に注目し、モチーフを類型化しその組列を仮定することで編年細分をおこなうという方法を用いた。分析の結果、モチーフは 1 類（6 種）、2 類（8 種）、3 類（6 種）に分けられ、1 類→2 類→3 類の順に変遷することが確かめられた。この知見にもとづき、後半期擦文土器甕の編年を、モチーフ 1 類が単文様列土器のみに施文される第 3 段階前半、モチーフ 1 類が単文様列土器と複文様列土器に施文される第 3 段階後半、モチーフ 2 類のみが単文様列土器と複文様列土器に施文される第 4 段階、モチーフ 3 類が単文様列土器と複文様列土器に施文される第 5 段階、の 4 時期に細分した。

第 5 章では、擦文土器に併行する道東部の土器型式であるトビニタイ式土器の編年整備と型式学的変遷過程の復元をおこなった。トビニタイ式には多種多様な貼付文を構造的に律する文様構成が認められ、これを「トビニタイ型文様構成」と呼んだ。「トビニタイ型文様構成」を柱とする諸属性のまとまりを重視することで、時期差と地域差の弁別、多相組

成を示す遺構一括資料の評価などに細心の注意を払いながら、1式、2式、3式、4式の4細分編年を設定した。この編年は、微細な属性の違いを十分な検証を踏まえずに時間差に還元する「小細別編年」なる営為によって設定された通説に対する逆転編年（柳澤 2007）を否定するものである。「トビニタイ型文様構成」に着目することでオホーツク貼付文土器からトビニタイ式への移行状況や擦文土器との型式交渉関係が明らかになり、これまでオホーツク土器と擦文土器が融合した土器群として一括りにされていたトビニタイ式の変遷を、オホーツク土器の系統を引く属性が擦文土器と接点をもちながら緩やかに変容してゆく過程として捉えることが可能になった。

第6章では、道南部の擦文土器甕の編年を検討した。器形と文様の全体的な変化の流れをおさえたうえで松前町札前遺跡出土土器群を4つに分類し、道央部以東の土器編年とのクロスデイトイングによって予察的な編年を提示した。

第7章では、擦文土器坏・高坏の編年整備と型式学的変遷過程の復元をおこなった。坏を器形と装飾の属性分析によって4群に、高坏は文様構成、器高に占める脚部高の比率、文様モチーフの属性分析によって6群に細分し、これらを遺構内共伴例と層位的出土例を参考に1～5段階の5時期にまとめた。その変遷過程を東北地方土師器坏と対比させると、第1段階は両地域で共通性が高く、第2段階から第3段階にかけて装飾→器形の順に北海道島で独自性が進行し、第3段階になって完全に東北地方と分離することが明らかになり、高坏の成立はこの独自性形成の延長の現象と評価された。擦文土器坏は東北地方土師器坏のあり方に規定されるような変化を遂げており、在地土器の系統が根強い擦文土器甕とでは、土器製作者を取り巻く情報のめぐり方に違いがあると考えられた。

第8章では、前半期・後半期擦文土器甕（甕系土器）と擦文土器坏・高坏（坏系土器）の各編年を遺構内共伴例によって総合し、器種組成単位の編年を第1期前半、同後半、第2期前半、同後半、第3期前半、同後半、第4期前半、同後半、第5期の9時期にまとめた。その結果、甕系土器と坏系土器とでは時間的変化のタイミングや変遷速度、地域性の表れ方などに違いがあることが明らかになった。この分析結果は、①着目する器種の違いによって時期区分が変わってくること、②ある器種の編年によって別器種の地域性を論じることはできないこと、③擦文土器の一括資料とは独自の時間的変化や地域化をたどる甕系土器と坏系土器が様々な形で組成したものであり、数例の一括資料を標識として適用できる範囲は限られるおそれがあること、といった多くの編年研究上の問題を提起するものである。

第9章では、各時期の共時的な型式間関係を復元した後その関係の通時的な変動過程を復元した。本稿であつかった時期は、後北 C2-D 式末期～北大 3 式 1 類期までの「第一次錯綜期」、擦文第 1 期前半～第 3 期前半までの「安定期」、擦文第 3 期後半～第 5 期までの「第二次錯綜期」の 3 時期に大きく分けられ、2 つの画期を境に型式間関係が変動すること、そしてこの変動が東北地方北部の土器様相の変化と連動していることが確かめられた。ただし、画期を挟んだ前後の時期で型式の分布範囲や交渉のあり方に連続性が認められるこ

とから、この変動は在地住人が主体となって隣接地域との関係を変化させることで生じたものであるとの結論に達した。この結論は、北海道島在地住人の大がかりな交替(大井 2004)よりも、在地住人が隣接地の住人と関係を結びながら不可逆的に社会のあり方を変えてゆくという歴史像(瀬川 2005)に整合するものである。